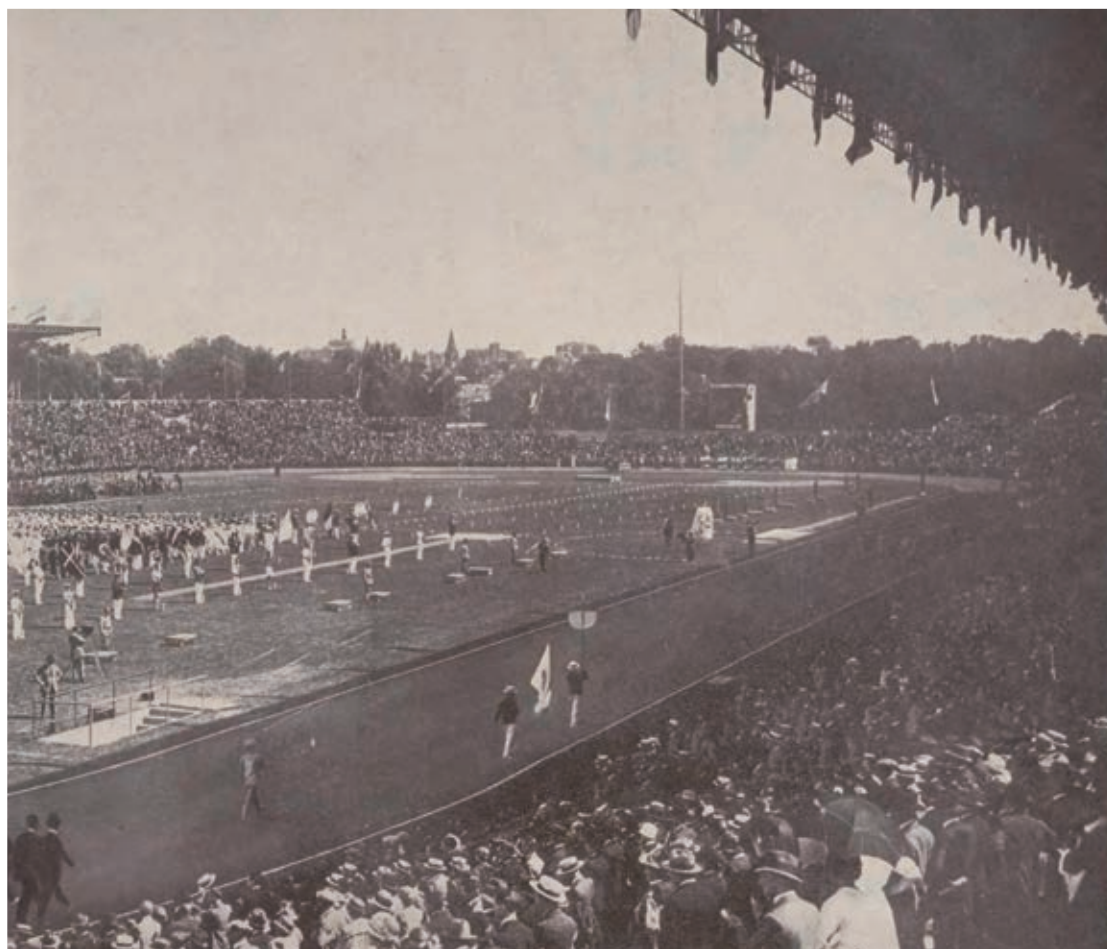


---

NATIONAL  
D I E T  
LIBRARY  
MONTHLY  
BULLETIN  
2024.7/8

国立国会図書館  
月報

---



第 59 回貴重書等指定委員会報告  
新たな貴重書のご紹介

世界図書館紀行  
ウェールズ国立図書館とヘイ・オン・ワイ ブック・フェスティバル

---

759/760 号 2024 年 7/8 月

---

国立  
国会  
図書館  
月報

NO. 759/760  
JULY/AUGUST 2024

CONTENTS

- 1 痕跡で楽しむ南葵文庫の旧蔵書  
— The Enoch Pratt Free Library of Baltimore City —  
今月の一冊 国立国会図書館の蔵書から
- 6 第59回貴重書等指定委員会報告  
新たな貴重書のご紹介
- 18 世界図書館紀行  
ウエールズ国立図書館と  
ヘイ・オン・ワイブツク・フェスティバル
- 25 電子展示会「錦絵と写真でめぐる日本の名所」
- 27 館内スコープ  
「面白〜」を引き出す
- 28 本屋にない本  
『殿さまの1年 盛岡藩年中行事を紐解く』
- 29 NDL TOPICS



表紙：1924年パリ五輪開会式の様子  
日本体育協会編『オリンピックと日本スポーツ史』  
日本体育協会, 1952. 31cm  
<https://dl.ndl.go.jp/pid/8799713/1/40>

# 痕跡で楽しむ南葵文庫の旧蔵書

— The Enoch Pratt Free Library of Baltimore City —

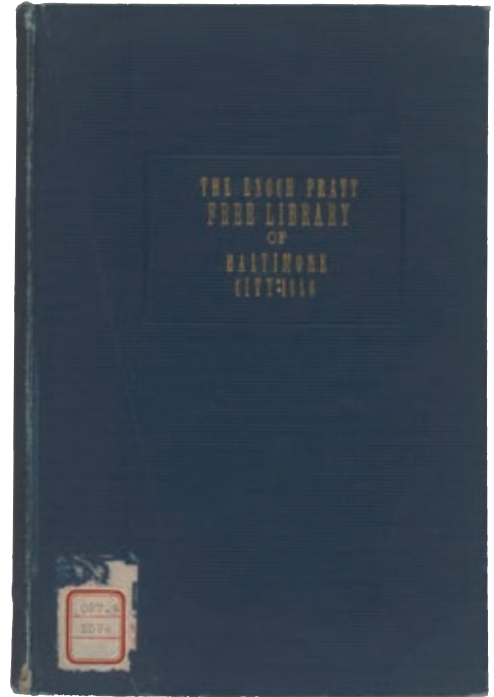
工藤 哲朗



蔵書印右上の書き込み

口絵裏

本書の蔵書印は南葵文庫で和装本に押されたのと同じタイプのもの。外郭の葵の葉の模様の中には「紀伊徳川」の文字も見える。



表紙



裏表紙にある「南葵文庫」の空押し（エンボス加工）

*The Enoch Pratt Free Library of Baltimore City:  
Letters and documents relating to its foundation  
and organization, with the dedicatory addresses  
and exercises, January 4, 1886.*

Baltimore: Enoch Pratt Free Library, 1886 122 p. front. (port.) 2 pl. 24 cm.  
<027.4-E59e>

今回ご紹介する一冊は、米国の実業家イーノック・プラット（1808～1896）の寄付により、同国メリーランド州ボルティモア市に1886年に開館したイーノック・プラット無料図書館をテーマとしたものだ。本書はプラットが市と交わした手紙や関連文書などを収録し、図書館設立の経緯や、設立者プラットの信念を伝えている。

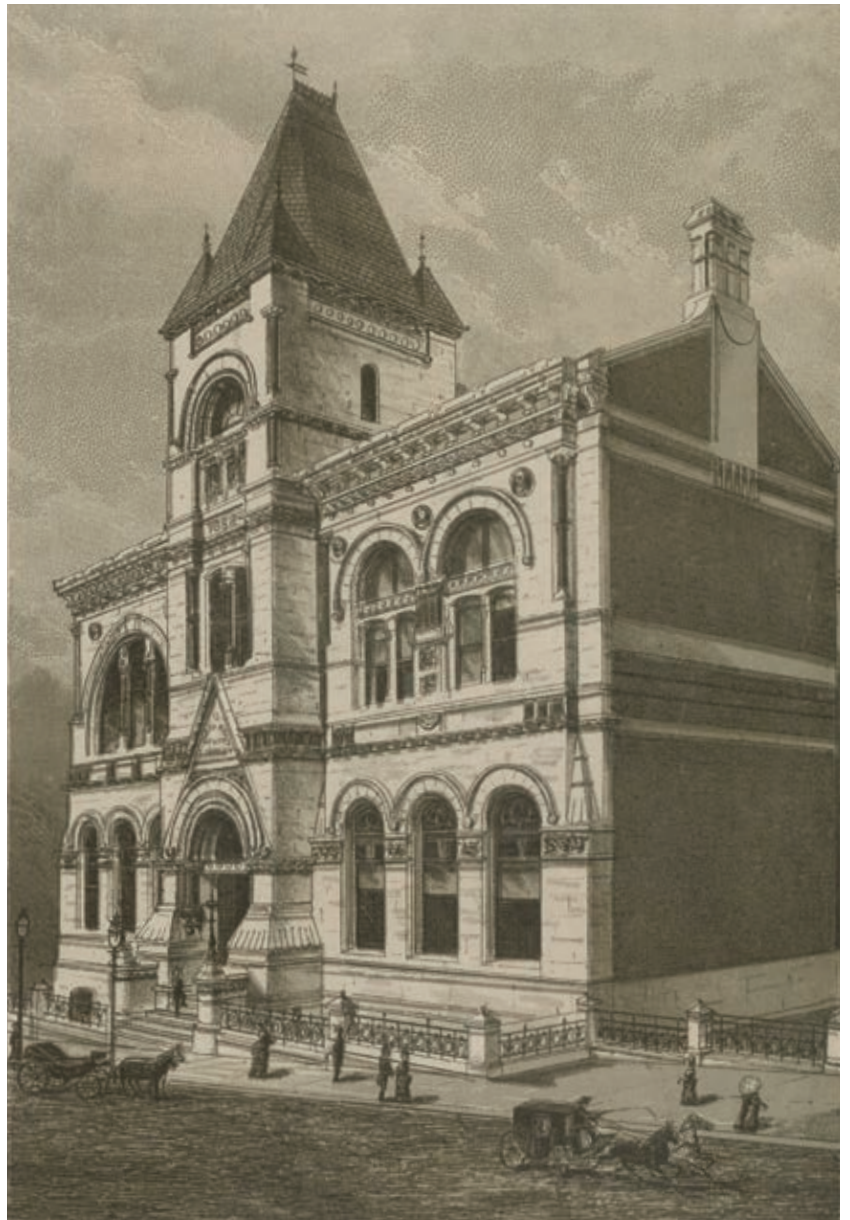
ただ、今回注目したいのは、その内容よりも本書に残る様々な「痕跡」——蔵書印、書き込み、受入印等々である。以下ではこれらを手掛かりに、この本の来歴に思いを巡らせてみたい。

まず本を開いて目につくのは、3.3センチメートル四方の「南葵文庫」の蔵書印だ。南葵文庫は、紀州徳川家の徳川頼倫（1872～1925）が私財を投じて東京・麻布の自邸内に明治31（1898）年に設立した図書館で、自家伝来の貴重な古典籍や、勝海舟、小中村清矩、松浦武四郎らの旧蔵書、さらには新たに集めた洋書などを広く一般の利用に供した。裏表紙には空押し（エンボス加工）で同じく「南葵文庫」の文字が見え、この本は南葵文庫がかつて所蔵し、製本し直したものとわかる。

蔵書印の右上には「October 19th 1897」との書き込みも見える。頼倫は明治29

(右) 開館当時のイーノック・プラット無料図書館本館（挿絵）。米国各地で図書館を寄付した実業家アンドリュー・カーネギーは「わが国では多くの無料図書館が設立されてきたが、ボルティモアのプラット図書館ほど賢明さを持ったものはほかに一つも知らない」と同館を賞賛した。近年では、2016年に同館館長だったカーラ・ヘイデン氏が米国議会図書館長に転じたことも話題になった。

(下) イーノック・プラットの肖像（口絵）。プラットは鉄道・銀行等の事業で財を成し、篤志家としても知られた。本書収録の手紙で、プラットは自らの図書館を「貧富や人種、肌の色にかかわらずなく、すべての人々のためのもの」にしたいと述べている。



(1896)年から明治30(1897)年にかけて欧米を外遊し、大英博物館図書室の訪問や、その熱心な利用者で当時在英の南方熊楠との交流などを経験する。この外遊を通して、頼倫は自らの手による図書館設立を構想するのだが、頼倫一行はこの間の1897年10月にボルティモアに滞在している。そして、随行した鎌田栄吉によると、一行はここで「富豪某」からの寄付を受けた「書籍の借料を徴」さない「貸本書館」を視察したという<sup>(1)</sup>。とすると、この本は頼倫がボルティモアでプラットの図書館を訪れた際に入手し、のちに南葵文庫の蔵書に加えたものではないか。書き込みが頼倫自身のものかは不明だが、後年の講演の内容からは、頼倫は図書館関係の洋書の内容をある程度把握していた様子もある。頼倫がこの本を読んでいたなら、(プラットと同様に)一個人として図書館を設立する上で、少なからず示唆を受けたに違いない。

ところで、気になるのはこの本が当館にある理由だ。頼倫は大正12(1923)年の関東大震災後、まだ焼け跡の煙も消えないうちに自ら東京帝国大学へ出向き、大きな被害を受けた同大附属図書館へ南葵文庫を建物ごと寄贈することを申し出た。翌大正13年7月4日には南葵文庫の「授受式」が挙行され、文

## 写真に残る南葵文庫



南葵文庫の閲覧室。中央の扁額は徳川慶喜の筆によるもの。  
(写真出典：『図書館雑誌』4号 日本図書館協会, 1908.10  
<https://dl.ndl.go.jp/pid/11230031/1/3>)



(右) 南葵文庫の外観。南葵文庫は明治31(1898)年に創設され、明治41(1908)年に一般公開された。公開後は講演会や展示会など、文化的活動を積極的に行い、草創期の日本図書館界を牽引する存在となった。

(左) 南葵文庫の庫主室での徳川頼倫。頼倫は外遊で図書館や文化財保護の重要性を認識し、のちには日本図書館協会総裁や史蹟名勝天然記念物保存協会会長なども務めた。

(写真出典：『グラフィック』1巻25号 有楽社, 1909.12 <https://dl.ndl.go.jp/pid/2661414/1/3>)



大正13(1924)年7月4日、南葵文庫の授受式での徳川頼倫(左)と古在由直東大総長(右)。式では関係者が一堂に会する中、桐箱に入った文庫の鍵を頼倫が古在総長に渡し、文庫の最後を華々しく飾った。

(写真出典：『読売新聞』1924年7月5日朝刊2面)

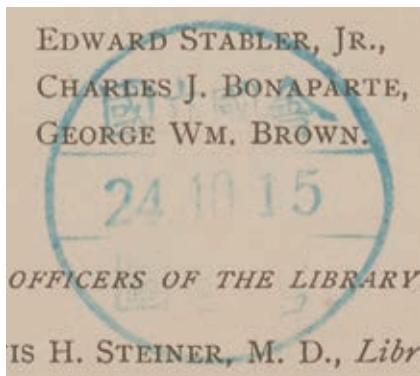
庫の蔵書約10万冊が正式に同図書館へと移管、南葵文庫はその歴史に幕を下ろした。この時に寄贈された蔵書は、東京大学附属図書館に引き継がれ、現在に至っている<sup>②</sup>。その南葵文庫の旧蔵書が、なぜ当館に現存するのだろうか。

ここで、標題紙の裏にある当館の受人印などを手掛かりに、当館がこの本を受け入れた際の状況を調べてみた。すると、この本は昭和24(1949)年に東京・神田の村口書房という古書店から購入された160冊ほどの洋書群(ほとんどが図書館・書物関係)のうちの一冊とわかった。さらに、それらのおよそ半数に南葵文庫の蔵書印やラベルが確認できた。

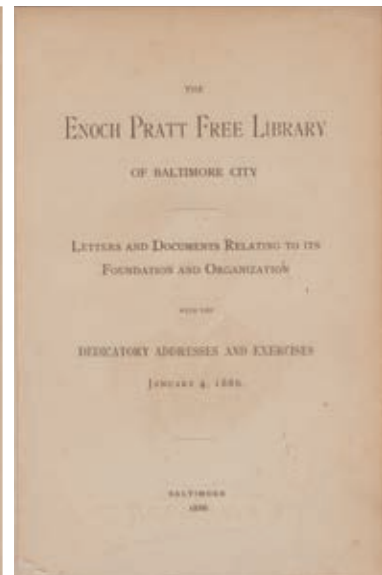
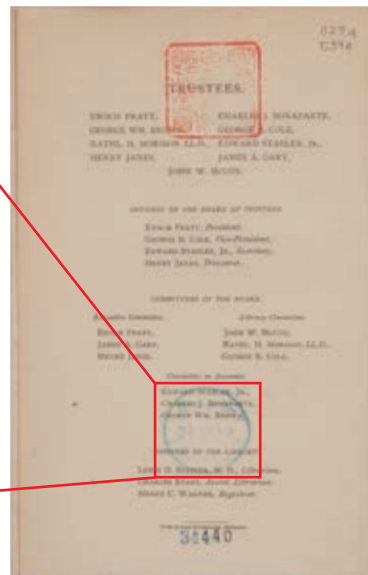
ここからは推測含みになるが、本書は南葵文庫の寄贈・閉鎖後も徳川家に残されたものだった可能性がある。実際、南葵文庫の寄贈時には、音楽関係の資料がその対象から除かれた。これは、頼倫の長男・頼貞<sup>よしかた</sup>(1892~1954)が経営する音楽図書館(南葵音楽図書館)の事業を継続するため<sup>③</sup>。そしてその音楽図書館の蔵書は、戦後の混乱の中で一部が古書店に出回っている。本書もまた、頼貞の音楽図書館の蔵書あるいは参考資料として徳川家に留め置かれたのち、古書市場へと流れ、それを開館から間もない当館が購入



当館庁舎として使用されていた赤坂離宮  
 (写真出典：『大東京写真帖』至誠書院, 1952  
<https://dl.ndl.go.jp/pid/3025446/1/39>)



当館受入印。日付は昭和24 (1949) 年10月15日。



(右) 標題紙 (左) 標題紙裏

したのではないか。  
 ちなみに、開館当初の当館は東京・港区の赤坂離宮を庁舎としており、その土地にはもと紀州徳川家の屋敷が建っていた。一度は徳川家を離れたこの本が、結局はまた同家ゆかりの地に納まったことには、奇縁を感じざるをえない。  
 以上、本に残された様々な痕跡を手掛かりに、その来し方について想像をたくましくしてみたが、果たしてどこまでの的を射たものになったか——南葵文庫の終焉から100年を経ようという今、それはもはやこの本だけが知ることだろう。

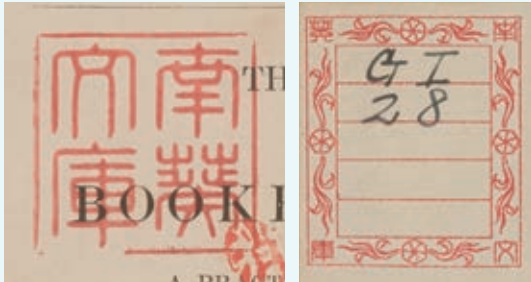
- 1 鎌田栄吉『欧米漫遊雑記』博文館, 1899, p.413  
<https://dl.ndl.go.jp/pid/760971/1/238>  
 該当の記事については林淑姫氏にご教示頂いた。
- 2 東京帝国大学附属図書館に寄贈された南葵文庫の蔵書は、現在東京大学附属図書館に引き継がれ、同館のOPACで検索することが可能。
- 3 徳川頼貞と彼が運営した南葵音楽図書館、南葵楽堂(音楽ホール)については次の記事も参照。  
 工藤哲朗「お殿様のパイプオルガン 南葵文庫附属御大礼奉祝記念館大風琴(今月の一冊 国立国会図書館の蔵書から)」本誌718号, 2021.2  
[https://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo\\_11624294\\_po\\_geppo2102.pdf?contentNo=1#page=3](https://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_11624294_po_geppo2102.pdf?contentNo=1#page=3)

## まだまだある こんな痕跡

本文で述べたとおり、今回ご紹介の一冊以外にも、当館には南葵文庫旧蔵の洋書が所蔵されている。ここではそれらに残る痕跡もご紹介したい。

まずは南葵文庫の洋装本用の蔵書印。今回取り上げた一冊を除き、当館に残る南葵文庫旧蔵の洋書に確認できた蔵書印は、すべてこちらのタイプのもの。今回の一冊にこの印が押されなかったのは、南葵文庫に入った時期が早く、まだ和装本用の印しか作られていなかったからかもしれない。

蔵書印のほか、請求記号を示すラベルが背や表紙に残る本も何冊もあり、この四隅にも「南葵文庫」の文字が見える。「GI」は南葵文庫で用いられた分類記号で、図書館業務に関する本であることを示す。こうした図書館や書物をテーマとした洋書から得られる情報は、南葵文庫の活発な活動を支える要素の一つにもなったのではないだろうか。



(左) 南葵文庫の洋装本用蔵書印 (*The art of bookbinding, a practical treatise*. 7th ed., 1911 <686-Z17a>)

(右) 南葵文庫のラベル (*Rules for a dictionary catalog*. 4th ed., rewritten, 1904 <025.3-C991r>)

ラベルを貼るのは図書館ばかりではない。それぞれの本を取り扱ったと思しい書店のラベルも、いくつかの本に残っている。これらのラベルは「書店票」などとも呼ばれ、大きさは概ね1×2.5cm程度。筆者が確認した範囲では、表紙の裏の左上や、裏表紙の裏の左下などに貼られていることが多い。南葵文庫は組織として現存しないこともあり、蔵書の収集経路も必ずしも明らかではないが、こうした書店のラベルはそれを解き明かす手掛かりになるだろう。



南葵文庫旧蔵の洋書に残る書店のラベル。左から順に「CHARLES HUTT」ラベル (*A history of booksellers, the old and the new*, [1873] <655.5-C982h>)、「The Times Book Club」ラベル (*The art of bookbinding, a practical treatise*. 7th ed., 1911 <686-Z17a>)、「BRENTANO'S」ラベル (*The public library movement in the United States 1853-1893*, 1913 <027.4-G798p>)、「MARUZEN Co. Ltd.」ラベル (*Examples of modern bookbinding*, 1919 <686-R625e>)。The Times Book Clubについては、カタログ (*A catalogue of the library of The Times Book Club*, 1921) が南葵文庫旧蔵書の一冊として東京大学附属図書館に所蔵されている。

### ○参考文献

Carnegie, Andrew. "The best fields for philanthropy". *The North American review*, Vol. 149, No. 397 (Dec. 1889)

徳川頼倫「紀念圖書館開館を祝す」『慶應義塾學報』179号 慶應義塾學報發行所, 1912.6 <https://dl.ndl.go.jp/pid/1744670/1/14>

*Catalogue of the Nanki Bunko*. 南葵文庫, 1914 <https://dl.ndl.go.jp/pid/1678285>

「南葵文庫授受式」『斯文』第6編3・4号 斯文会, 1924.8 <https://dl.ndl.go.jp/pid/6072148/1/42>

姉崎正治『年の始の御祝を申し上げむため我が大學圖書館復興について所感を述べ復興状態の寫眞を御覽に供す』東京帝國大學圖書館假事務室, 1928 (東京大学文学部宗教学宗教学史学研究室所蔵、姉崎正治関係資料目録番号: 文223)

『東京帝国大学五十年史』下冊 東京帝国大学, 1932 <https://dl.ndl.go.jp/pid/1453613>

「南葵音楽文庫近く公開」『日本古書通信』32巻3号(通号452号) 日本古書通信社, 1967.3 <Z21-160>

平野喜久代編『蔵書印集成』平野喜久代, 1974 <W991-33>

稲村徹元「南葵文庫(国立国会図書館所蔵本 蔵書印(その131))」本誌297号, 1985.12 <Z21-146>

佐藤賢一「東京大学総合図書館所蔵「南葵文庫」について その来歴と今後の展望に向けて」『大学図書館研究』74巻 学術文献普及会, 2005.8 <Z21-397>

鈴木宏宗「The care of books 建物・設備・備品(今月の一冊 国立国会図書館の蔵書から)」本誌633号, 2013.12

[http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo\\_8386132\\_po\\_geppo1312.pdf?contentNo=1#page=4](http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_8386132_po_geppo1312.pdf?contentNo=1#page=4)

林淑姫「南葵音楽文庫小史 「南葵音楽図書館」の遺産とその継承」『現代の図書館』60巻1号(通号241号) 日本図書館協会, 2022.3 <Z21-8>

「南葵文庫」東京大学附属図書館ウェブサイト <https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/general/collectionall/nanki>

「書店票にみる東京の古書店」東京都古書籍商業協同組合ウェブサイト <https://www.kosho.ne.jp/?p=407>

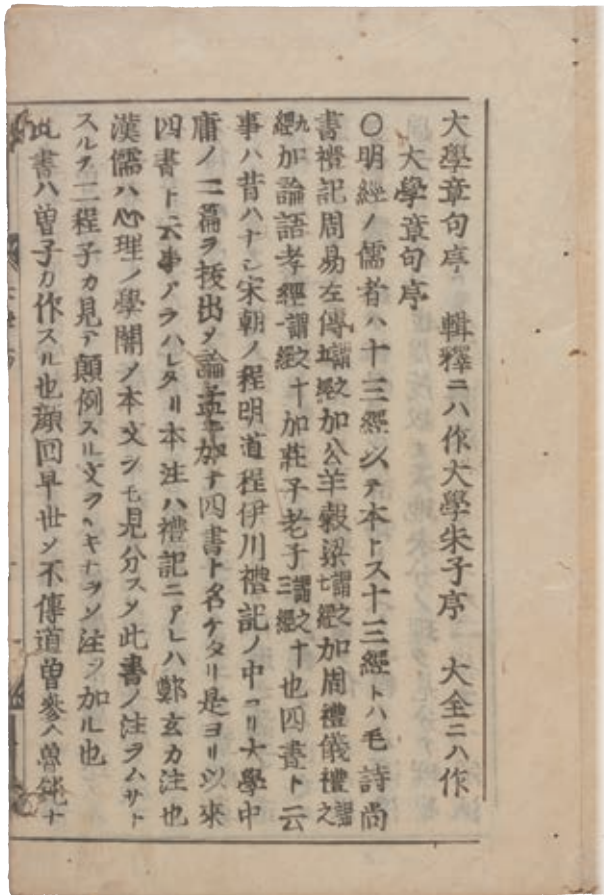
※ウェブサイトの最終アクセス日: 令和6(2024)年5月10日

※原則、引用の旧字は新字に改めた。

※<>内は当館請求記号

# 第59回貴重書等指定委員会報告

## 新たな貴重書の紹介



巻頭

### だいがくしょうくしょう 大学章句抄

<請求記号 WA7-303>

[清原宣賢][撰] [元和・寛永年間]

1冊 大きさ28.7×19.6cm

古活字版 書名は巻末による

序題: 大学章句 版心書名: 大学抄 四周单辺(23.8×15.3cm) 無界  
每半葉11行 字数不等25字内外 上下花魚尾 黒口 版心「大学抄  
(丁数)」 漢字片仮名交じり 袋綴じ 四つ目綴じ 黄金色枝梅模様表紙  
(後補) 『論語抄』(請求記号: WA7-304)と装丁共通、同一の木箱に納め  
る(木箱の蓋に「古註大學論語之抄 十冊」の墨書、側面に「古註大學  
論語抄」の貼紙あり) 印記: 信元



国立国会図書館は、蔵書のうち、資料的価値が高いものなどを「貴重書」「準貴重書」に指定しています。令和6年2月21日、和漢書4点を貴重書に、和書3点を準貴重書に指定し、累計で貴重書は1329点、準貴重書は805点となりました。

(貴重書等指定委員会)

『大学章句抄』はいわゆる「抄物」の一つで、南宋・朱熹(しゆき)『建炎4(1130)』慶元6(1200)の『大学章句』に対する、清原宣賢(のぶかた)『文明7(1475)』天文19(1550)を中心とする清原家に  
よる解説書です。中世においては清原家の秘説として扱われていたが、江戸時代初期に古活字版として出版され、寛永年間(1624)1644)に刊行された整版が広く流布することとなりました。

本書は元和・寛永年間(1615)1644)の出版と推定される古活字版です。古活字版『大学章句抄』は5種の存在が確認されていますが、いずれも伝本が少なく、当館本と同じ版は、これまで小汀文庫本の



## 『大学章句抄』の欠損字の例



表紙

## 古活字版と整版



(参考)活字の例  
駿河版銅活字 一の箱  
慶長11(1606)～元和2(1616)年制作  
TOPPANホールディングス株式会社所蔵

古活字版とは活字(一文字または数文字単位の字型)を組んで印刷されたもののうち、特に安土桃山時代の文禄年間(1592～1596)から江戸時代の慶安年間(1648～1652)にかけて出版されたものをいいます。一方、整版とは版木(文字や絵を彫った板)を用いて印刷されたものです。

奈良時代以来、日本の出版の主流は整版でしたが、上述のように安土桃山時代から江戸時代初頭のおよそ50年の間には古活字版が盛んに出版されました。古活字版が出版された期間は長くはありませんが、『日本書紀』『源氏物語』『太平記』等の日本の主要な古典作品の多くが初めて出版されるなど、江戸時代に多様な出版文化が花開く契機となりました。しかし、書物の需要が増大し商業出版が盛んになると、増刷のたびに活字を組み直す必要がある古活字版に替わって、出版の主流は再び、整版へと移っていきました。

※リサーチ・ナビ「国立国会図書館所蔵 古活字版目録」のページでも、古活字版について知ることができます。

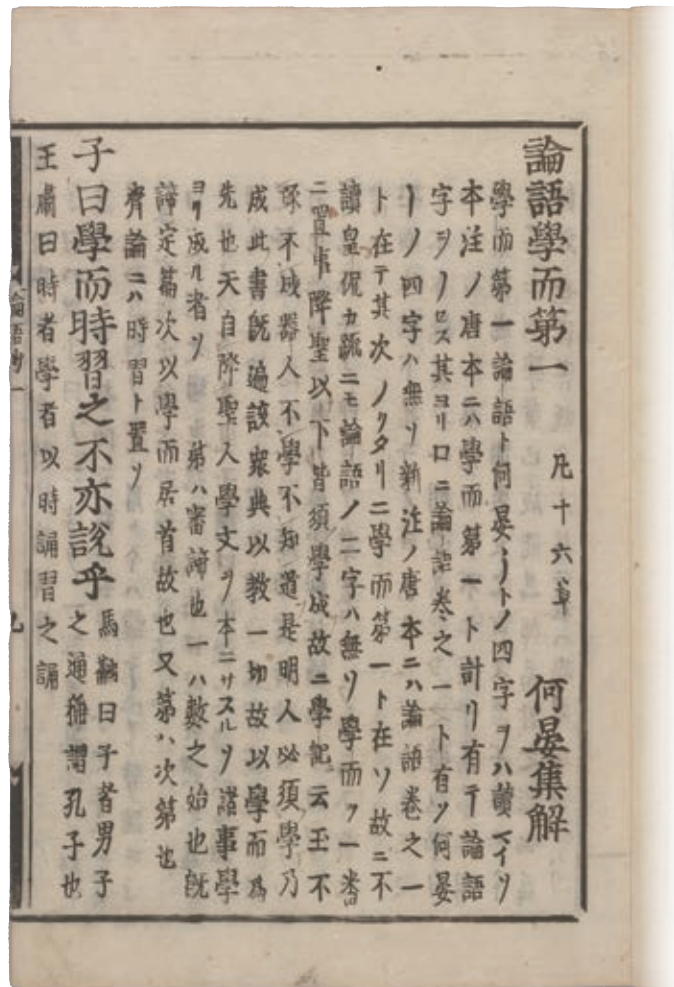
[https://ndlsearch.ndl.go.jp/rnavi/oldmaterials/Kokatsuji\\_ban](https://ndlsearch.ndl.go.jp/rnavi/oldmaterials/Kokatsuji_ban)



1冊しか知られていませんでした。5種の古活字版のテキストには細かな違いが認められますが、相互の関係性は明らかにされておらず、今後の研究が待たれます。

なお、当館本と、龍谷大学図書館所蔵『中庸章句抄』<sup>③</sup>巻上には、同じ特徴を持つ欠損字が見られます。古活字版の『大学章句抄』のほとんどは『中庸章句抄』と共時に刊行されたと推定されており、その推定を傍証するものと言えるでしょう。

- 1 室町時代から江戸時代初期にかけて、五山(幕府や朝廷によって認定された、禅宗で最高寺格の寺院)の僧侶や儒者等が漢籍・仏典・国書に注釈を付したものと、またその講義を記録したもの。
- 2 小汀文庫は、ジャーナリスト・評論家として知られる小汀利得(おばまとしえ、1889～1972)の蔵書。なお同文庫の多くは、利得の死後入札に付され散逸した。小汀文庫本『大学章句抄』も現在所在不明である。
- 3 『中庸私抄章句』 龍谷大学図書館貴重資料画像データベース「龍谷蔵」<https://da.library.ryukoku.ac.jp/page/130244>
- 4 川瀬一馬『古活字版之研究』増補版、中巻、日本古書籍商協会、1967、p.807 <https://dl.ndl.go.jp/pid/2972407/1/75>



第1冊学而第一巻頭。『論語集解』の編者・何晏の名のみが記され、和文註の作者は不明である。

## ろんごしやう 論語抄

<請求記号 WA7-304>

[元和・寛永年間]

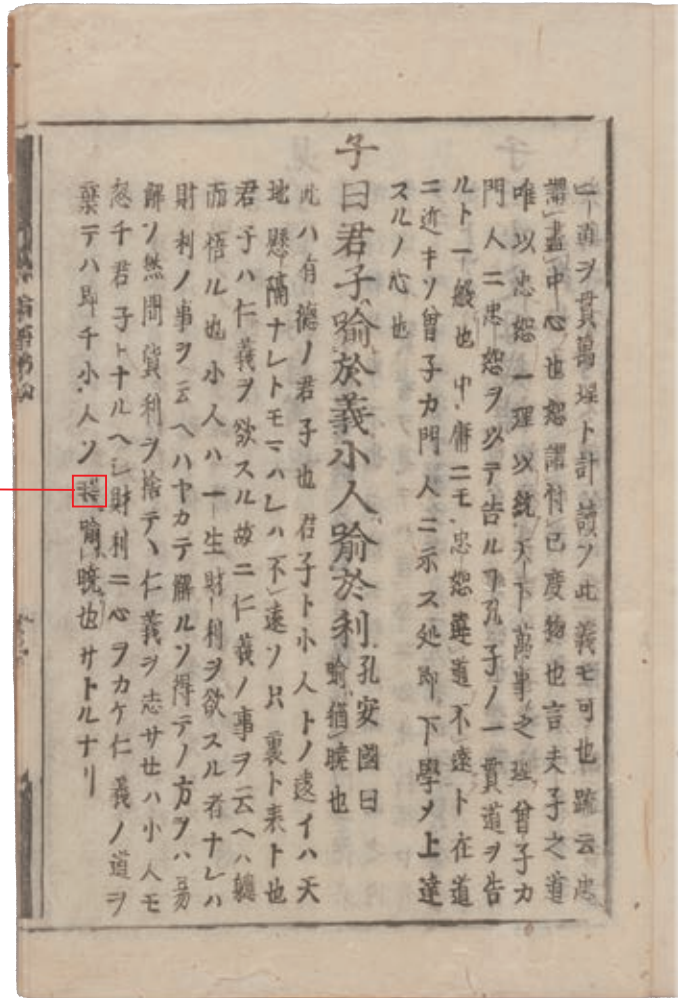
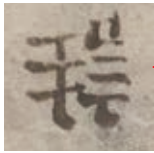
9冊 大きさ28.6×19.6cm

古活字版 書名は序による 最終巻巻末及び書き題簽の書名: 論語之抄 版心書名: 論語抄 四周単辺(23.1×16.1cm) 無界 毎半葉18行 毎行18~21字不等(經文2行相当 毎半葉9行 毎行18字) 上下の魚尾は黒口と連続し三角形又は花弁を彫り込む 版心「論語抄一(〜廿)(丁数)」漢字片仮名交じり袋綴じ 四つ目綴じ 黄金色枝梅模様表紙(後補) 内墨地の書き題簽(第8冊のみ、剥離した状態で残存) 衛靈公第十五第11丁を欠く 訓点、振り仮名の墨書書入れあり



『論語抄』は、三国時代・魏の何晏(生年不詳〜正始10(249))が『論語』の注釈をまとめた『論語集解』に、漢字片仮名交じりの日本語で註をほどこした「抄物」の一種です。著者名は記されていませんが、語法等から清原家の系統による注釈と考えられます。

本書は江戸時代の初期に刊行された古活字版です。『論語抄』の古活字版には2種が知られており、文字の配置等はよく似ていますが、本文の周囲を囲む枠線が単線(単辺)か二重線(双辺)かで見分けることができます。本書はこのうちの単辺本と認められます。当館本は6〜7頁で紹介した『大学章句抄』と同じ木箱に収められていたものです。ただし、両書は版式等が異なるため、別々に刊行されたものと考えられます。儒家の基本経典である四書(大学、中庸、論語、孟子)の抄物から2点を選んで組み合わせたものでしょう。両書で揃いの装丁が施されていますが、『大学章句抄』1冊と合わせた全10冊のうち、ほとんどの題簽が失われています。『論語抄』第8冊の題簽1枚のみが剥離した状態ながら残っており、かつての姿を伝えています。



第2冊里仁第四10丁表。転倒活字（第17行の「註」字）がある。

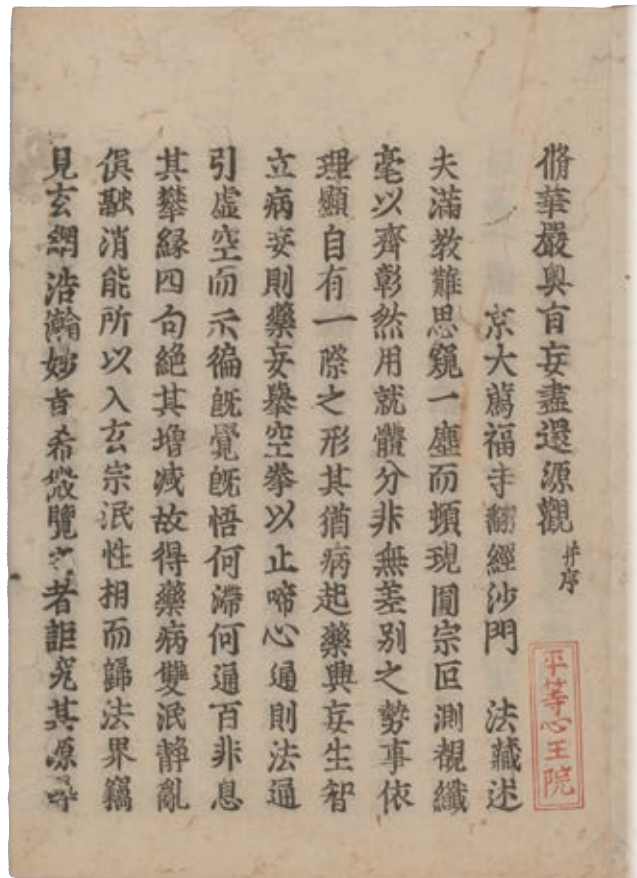


当館本及び6～7頁で紹介した『大学章句抄』（当館本）を収めていた箱。



第8冊表紙。剥離した題箋とも。

5 每半葉あたりの行数と合わせて「単辺 18 行本」と呼称される。当館以外では、静嘉堂文庫、石川武美記念図書館成實堂文庫、日光輪王寺天海蔵の所蔵が知られている。



巻頭。「平等心王院」の朱印は一部の伝本にのみ見られ、同所での刊行時に一律で捺されたものではない。当館本は刊行後にすぐには他所に渡らず、一定の期間は平等心王院で保管されていたことがうかがえる。

しゅうけ こんおう し もうじんげんげんかん  
脩華嚴奥旨妄盡還源觀 1巻

貴重書

<請求記号 WA7-305>

(唐)釋法藏述 (宋)釋淨源重校 槇尾平等心王院 寛永8[1631]  
1冊 大きさ27.8×20.3cm

古活字版 表紙打付書書名: 還[源]觀 無辺無界 每半葉10行 每  
行17字内外 字高21.2cm 版心に丁数を記す 綾装 四針眼訂法  
茶色表紙 表紙左肩に打付書書名、右肩に「盈二」の朱書き、左下に「劔」  
[ほか]、右下に「平等心王院」の墨書きあり 印記: 平等心王院

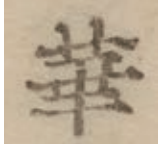
『脩華嚴奥旨妄盡還源觀』は、華嚴宗の第三祖とされる唐の法藏(貞観17(643)〜先天元(712))による、華嚴宗の観法を説いた著作です。唐の実又難陀(永徽3(652)〜景雲元(710))が漢訳した八十卷華嚴經(証聖元(695)〜聖暦2(699)年訳出)の経文が多く引用されていることなどから、法藏の晩年の著作と推定されています。

本書は寛永8(1631)年に、槇尾山平等心王院において出版された古活字版です。平等心王院では計4点の古活字版の出版が知られていますが、そのうち当館で所蔵しているのはこの『脩華嚴奥旨妄盡還源觀』のみです。いずれも現存する伝本は少ないものの、平等心王院で4点の古活字版が出版されたことから、当時洛中の寺院で盛んに行われた古活字版出版の影響が洛外にまで及んでいたことがうかがえます。

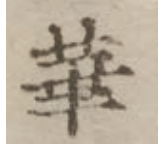
本書では、本紙19丁の中で、特徴のある字が繰り返し登場するという古活字版の特性を確認することができます。当館本は印面への書入れ等も見られず、平等心王院でどのような活字が使われていたのかを、そのまま今に伝える資料です。

欠損字の例

華

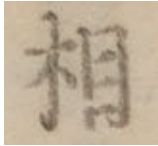


4丁表6行目

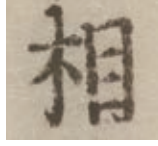


11丁表5行目

相

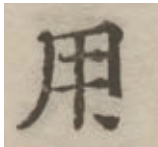


4丁表5行目

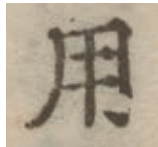


11丁表4行目

用



3丁裏8行目

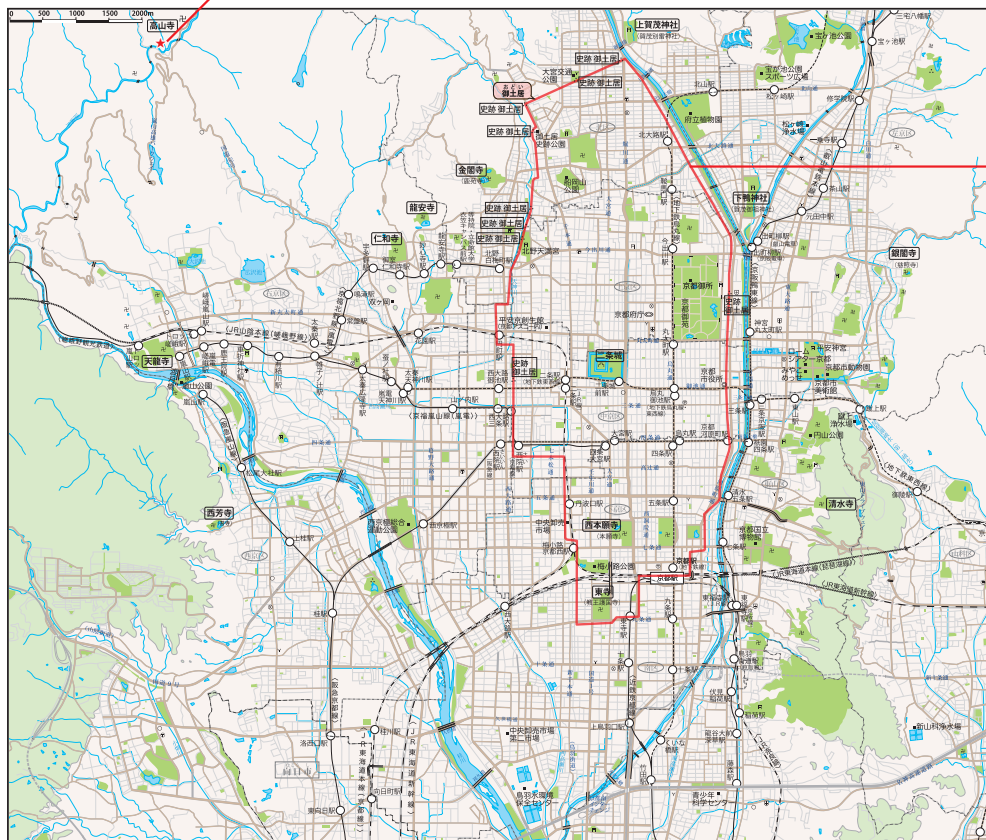


7丁裏10行目



表紙

榎尾山平等心王院(西明寺)



御土居が築かれていた位置

榎尾山平等心王院と洛中との位置関係を示した図。洛中とは、16世紀末に豊臣秀吉が京都の都市改造の一環として築いた御土居によって囲まれた区域を指す。

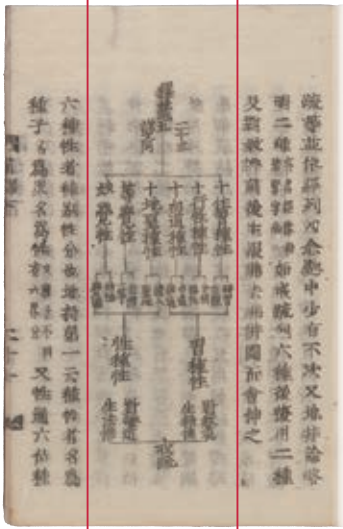
一般社団法人京学ラボ発行「御土居跡マップ」(<https://kyo-gaku.net/original-contents/>)

6 一心不乱に仏法の真理を心の中で思い極めようとする修行。

7 京都市右京区にある真言宗大覚寺派の寺で、寺号は西明寺。高雄山神護寺、桐尾山高山寺とともに三尾の古刹として知られる。

8 本書のほか、『般若波羅蜜多心経疏』、『菩薩戒本序』、『律鈔宗要略為十門』。

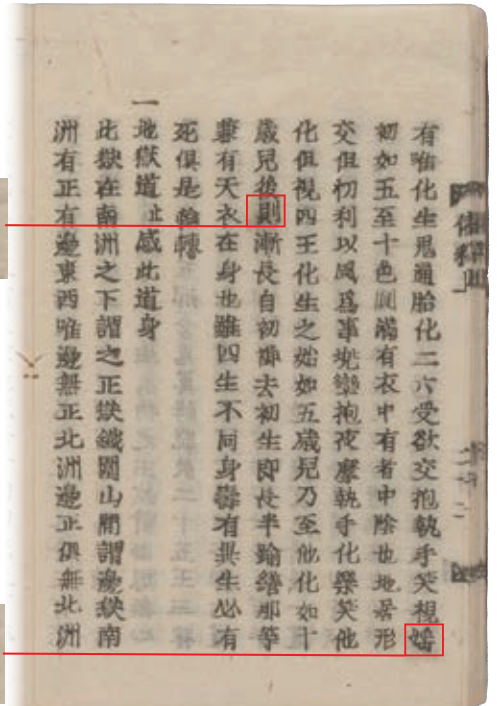
整版



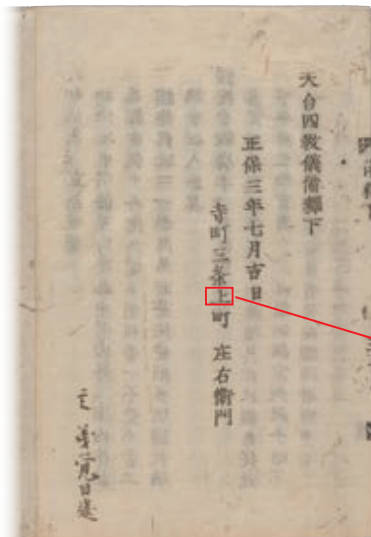
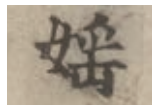
第2冊21丁表。図は整版によって作成されている。



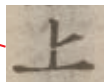
第1冊巻頭



第1冊22丁裏。本文中の誤植と思しき箇所从上から紙を貼って修正したもの。成賞堂文庫本にも同様の修正がある。



第2冊巻末。刊記と一部欠損字。



### てんだいしきょうぎびしやく 天台四教儀備釋 2巻

<請求記号 WA8-20>

(宋)元粹述 [京都] 庄右衛門 正保3 [1646]

2冊 大きさ27.8×18.5cm

古活字版 巻末書名:天台備釋 版心書名・外題(打付書)・小口書:備釋 刊記に「正保三年七月吉日/寺町三条上町 庄右衛門」とあり 無辺無界 毎半葉10行 毎行20字 上下花魚尾 白口 版心「備釋上(下) (丁付)」 整版による図を含む 綾装 五針眼訂法 栗皮色表紙(押八双あり) 題簽なし 2冊とも巻頭に「智舜」(墨で塗消)、巻末に「義覚」(第1冊)・「主義覚日口」(第2冊)、後ろ見返しに「慶安二年七月廿九日」(続く数行は墨で塗消)の墨書あり 印記:花林什物

貴重書

宋の元粹(生没年不詳)による『天台四教儀備釋』は、天台教学の大綱を解説する『天台四教儀』の代表的な注釈書で、『天台四教儀集註』、『天台四教儀集解』と並んで中国天台教学における三大注釈書と呼ばれています。

本書はその古活字版で、正保3(1646)年に京都寺町三条の庄右衛門という書肆(本屋)より出版されました。古活字版ではありませんが、中に収録されている図は整版によって作成されているといった特徴もあります。国内では他に叡山文庫と石川武美記念図書館成賞堂文庫が所蔵していますが、一部欠損した文字が共通することから同版であることが確認できます。

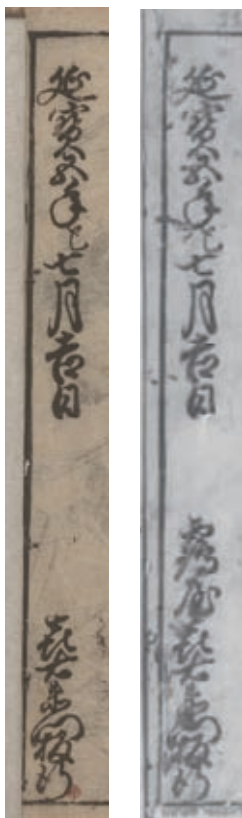
なお、本書を刊行した書肆は、同じ正保3年に整版の『天台四教儀集解抄』も出版しています。古活字版は商業出版を行う町方の書肆による出版が盛んになるに従い、徐々に整版に移行していったと言われますが、同時期に同じ書肆が古活字本と整版本を並行して出版していたことは当時の出版事情を考察する上で興味深いことです。

9 天台宗の教理の研究を行う学問。

10 岡雅彦ほか『江戸時代初期出版年表 天正19年~明暦4年』勉誠出版,2011<当館請求記号UP3-J34>による。

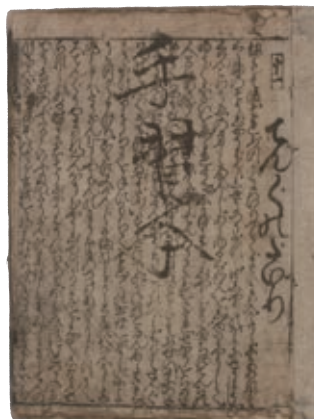


2丁裏～3丁表。源氏再興を目指す義経への加勢を誓う天狗たち。



(右) 東京大学国文学研究室所蔵本の刊記部分  
国文学研究資料館「国書データベース」  
<https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/100018429/18?ln=ja>

(左) 当館本の刊記部分  
「鶴屋」の文字が削られている。



巻頭

## てんぐのだいら

<請求記号 WB2-13>

喜右衛門 [元禄・宝永年間]

1冊 大きさ22.0×15.6cm

版心書名: 天く(第1、11、13 14丁)、てんぐ(第2丁)、てんく(第3-5、7-10、12、15丁)、天[□](第6丁 陰刻) 延宝5年鶴屋喜右衛門版の後印 刊記に「延寶五年巳七月吉日 喜右衛門板行」とあり 一部筆彩挿絵6図 袋綴じ 四つ目綴じ 四周半辺 上下黒魚尾 黒口 每半葉17行 毎行35字内外 漢字平仮名交じり 節付けあり 版心下方に丁付け(一～十五)あり 表表紙: 黒色 裏表紙: 栗皮色 1丁表に「手習本」の墨書あり 小山源治旧蔵



『てんぐのだいら』は、延宝5(1677)年に刊行された絵入細字浄瑠璃本です。関東大震災で焼失した伝本に「源氏/十二/だん/天狗内裏/宇治嘉太夫直之正本」と刷られた題簽が確認されたことから、古浄瑠璃太夫・宇治加賀掾(寛永12(1635)～正徳元(1711)の正本と考えられています。作者の記載はありませんが、修行時代の近松門左衛門(承応2(1653)～享保9(1724))は加賀掾のために無署名で作品を書いていたこと、近松の作品である『十二段』と詞章が相当箇所一致することから、近松が関わった最初期の作品と推定されています。

現在確認できる伝本は、東京大学国文学研究室所蔵の一本と当館本のみです。両本は同版ですが、東京大学所蔵本の刊記が「鶴屋喜右衛門板行」であるのに対し、当館本の刊記は「鶴屋」の文字を削った「喜右衛門板行」であることから、当館本は「鶴字法度」が発せられた貞享5(1688)年以降の後刷りであると考えられます。浄瑠璃本の後刷りの時期が判明することは稀であり、興味深い資料といえます。

11 若月保治『古浄瑠璃の新研究 延宝・享保編』新月社, 1939 <https://dl.ndl.go.jp/pid/1685258>

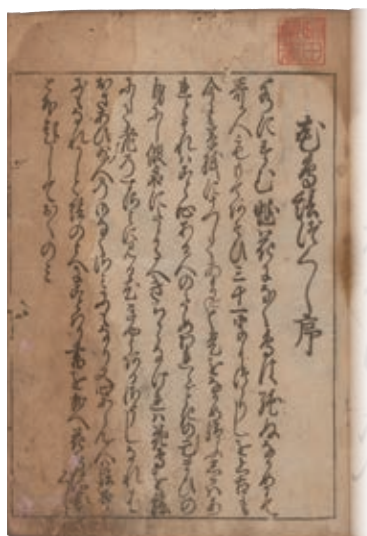
12 竹本義太夫と近松門左衛門の提携による新しい浄瑠璃に対して、それ以前の浄瑠璃の総称。

13 浄瑠璃太夫使用の原本を正確に写した本。

14 5代將軍徳川綱吉が娘鶴姫の名である「鶴」の字の使用を禁じた触。貞享5年と元禄3(1690)年の2回発せられたとされる。



3丁裏～4丁表。孔雀の図。上段の解説では、孔雀についてその名を知らないということはないほどの名鳥で他の鳥よりも優れていると紹介されている。



巻頭

## 花鳥絵づくし

<請求記号 WB36-10>

菱川[師宣][画] [江戸] 鱗形屋 天和3[1683]

1冊 大きさ27.0×18.5cm

書名は序による 版心書名:花鳥盡 題簽書名は上部が欠け「つくし」の部分のみ 刊記に「天和三年五月吉日 畫師菱川真跡/大傳馬三町目/鱗形屋開板」とあり 四周单边 無界 匡郭内22.4×16.6cm(上欄:縦5.0cm 下欄:縦17.4cm) 版心「花鳥盡 一(～卅一)」 袋綴じ 五つ目綴じ 黄土色無地表紙 表紙中央に題簽(上部破損) 印記:町田藏書



『花鳥絵づくし』は、浮世絵の確立者として知られる菱川師宣(生年不詳～元禄7(1694))が四季折々の花や草木、鳥や虫を描いた花鳥絵本です。各丁の下部4分の3に花や鳥の絵が大きく描かれ、上部4分の1に、下部で描かれた花の咲く時期やその色、鳥の外見の特徴や生態などが平易な言葉で記されています。『花鳥絵づくし』は、菱川師宣の唯一の花鳥絵本であり、全編で花鳥を扱った浮世絵版画の先駆的な作品として注目されています。

本書は、天和3(1683)年5月に鱗形屋うろがたやという江戸の有力な出版元から刊行された初版本です。刊記には「畫師菱川真跡」という署名がありますが、これは特殊な署名で、菱川師宣の版本としては他に天和4年刊行の『当世早流とうせいざりゅう雛形ひながた』でのみ使用が確認されています。

国内の他機関で所蔵が確認できるのは、京都大学附属図書館のみです。<sup>1)</sup> 京都大学附属図書館は、名古屋の貸本屋である大野屋惣八の旧蔵本で、一部の鳥の絵が切り取られています。当館本は現在確認できる範囲では国内で唯一すべての図を取めている伝本です。





16丁裏～17丁表。右側にはカキツバタとシギ、左側にはツタカズラとヒヨドリが描かれている。上段の解説では、カキツバタが『伊勢物語』に登場することなどが紹介されている。



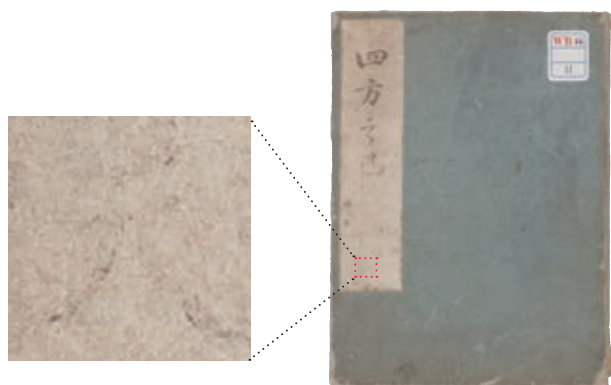
1丁裏～2丁表。鳳凰、桐の図。上段の解説では、鳳凰について昔から言い伝えはあるが見たことがある者はおらず、天竺に住む鳥であると紹介されている。

15 <当館請求記号 本別 7-25 >

16 国外では、フランス国立図書館と、ハーバード大学フォッグ美術館で所蔵。



挿絵「遊女と侍」(山東京伝)



表紙の題簽下部の拡大図  
題簽の下部にうっすらと「天」とあることが確認できる。

表紙

## よものはる 四方之巴流

<請求記号 WB36-11>

四方歌垣主人[編] [寛政年間]

1帖 大きさ21.0×15.5cm

書名は題簽による 見開き34面のうち彩色刷挿絵3面 本文: 無辺無界(1面28行) 挿絵: 四周単辺 画帖装 菊文亀甲繫ぎ表紙(原装 表: 縹色裏: 鳥の子色) 表紙左肩に原題簽「四方之巴流 天」(白色布目地に金色の単辺)を貼付 中山楽童子安里黒主序、一日葺主人序、自序あり 巻末に「春興二十首/狂歌堂四方真顔」とあるが7首のみを収める\*。

\* チェスター・ビーツィ図書館所蔵本、ボストン美術館所蔵本も同様であり、伝来の過程で欠落したのではなく、このような形で出版された可能性が高いと考えられる。

準貴重書

『四方之巴流』は、新春を祝う狂歌を集めた歳旦狂歌集です。編者の鹿都部真顔(宝曆3(1753)〜文政12(1829))は江戸時代後期の狂歌界の中心人物の一人で、寛政7(1795)年に『四方の巴流』という豪華な歳旦狂歌集を版元葛屋重三郎(初代 寛延3(1750)〜寛政9(1797))より刊行しました。本書はそれに続いて編纂された同名の狂歌集で、当館本には各地の狂歌連(グループ)から寄せられた約380首の狂歌に「七福神に鶴」(絵師8名の寄書き)・「遊女と侍」(山東京伝)・「正月の諏訪湖氷渡り」(鍛形蕙翁)の挿絵3図が収められます。

本書の伝本は当館のほかチェスター・ビーツィ図書館、ボストン美術館、中央大学に所蔵が確認できますが、版面の状態から当館本の刷りが最も早いと見られます。

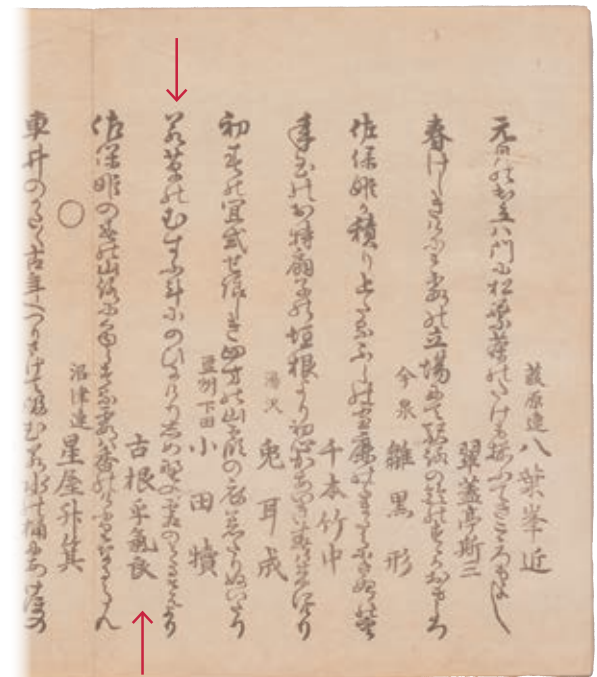
なお、当館本の題簽をよく見ると「四方之巴流 天」とあることがわかります。「天」ということは「地」に当たるものが他にあったのでしょうか。本書の成立事情について、さらなる調査・研究が期待されます。



挿絵 「正月の諏訪湖氷渡」(鍛形蕙斎)



チェスター・ビーティ図書館所蔵本 第20面



当館本 第20面

6人目小田櫛の狂歌の部分が変わっており、その左側「古根乎氣良」の「根」最終画のはらい、「氣」第4画のはね、「良」最終画のはらいがチェスター・ビーティ図書館所蔵本では一部欠けていることがわかる。これは当館本を刷った後、埋め木で狂歌の差し替えを行った際に字画の一部が削られたためと考えられる（ボストン美術館所蔵本はチェスター・ビーティ図書館所蔵本と同じ）。

※チェスター・ビーティ図書館所蔵本は Chester Beatty Online Collections (cbl.ie) ([https://viewer.cbl.ie/viewer/image/J\\_1655/20/](https://viewer.cbl.ie/viewer/image/J_1655/20/)) からクリエイティブ・コモンズ・ライセンス（表示 4.0 国際）のもとに掲載（<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>）。

- 17 中央大学所蔵本は欠あり。いずれの伝本にも刊記はないが、チェスター・ビーティ図書館所蔵本に基づき、寛政8年刊（植崎宗重 編著・監修『秘蔵浮世絵大観 別巻』講談社、1990 <YP14-1241> 等）と推定されている。挿絵は伝本により異同があり、また当館本は以下の点がチェスター・ビーティ図書館所蔵本・ボストン美術館所蔵本と相違する（中央大学所蔵本は当該箇所を欠く）。

	当館本	チェスター・ビーティ図書館所蔵本・ボストン美術館所蔵本
第9面	13名13首。 11～13名目の記載「同島田 水口茂原」「同 田澤定也」「同水久保 水窪田丸」。	14名14首。 14名目に「相州鞠子連 油喜代住 熊谷の土手の柳の・・・」あり。 11～13名目の記載「水口茂原」「田澤定也」「水窪田丸」。
第20面	6名目小田櫛の狂歌「若草のむすぶ斗に・・・」	6名目小田櫛の狂歌「ひさこ形なる初空を・・・」

※ボストン美術館所蔵本については小林ふみ子氏のご指示によります。



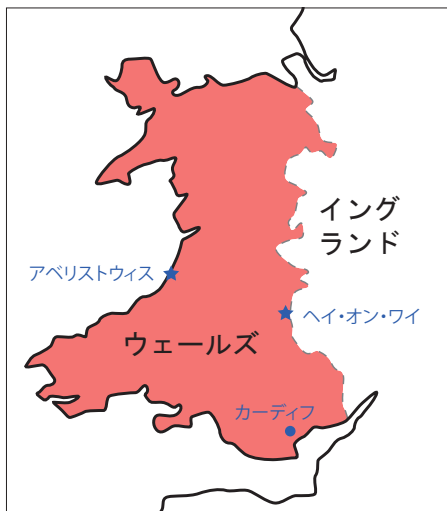
(左) ウェールズ国立図書館のメインエントランス。(右) ヘイ・オン・ワイの街中にあるミステリ専門の古書店。

# 世界図書館紀行

ウェールズ国立図書館と

ヘイ・オン・ワイブック・フェスティバル

松永 しのぶ



はじめに  
イギリスは、正式名称をグレートブリテン及び北アイルランド連合王国といい、イングランド、ウェールズ、スコットランドそして北アイルランドの4つの「国」から構成されています。それぞれの「国」は独自の文化と言葉を持っています。  
筆者はウェールズのアベリストウイス大学に、電子情報の長期保存について学ぶために2022年9月から2023年8月まで長期在外研究員制度を利用して留学しました。本稿では、その際に訪問したウェールズ国立図書館 (National Library of Wales、以下NLW) と「本の聖地」ヘイ・オン・ワイのブック・フェスティバルについて紹介します。

## ウェールズ語

ウェールズ語は語順が日本語とも英語とも異なります。例えば「ウェールズ国立図書館」の表記は Llyfrgell Genedlaethol Cymru です。これは Llyfrgell = 図書館・Genedlaethol = 国立・Cymru = ウェールズで、後ろから語を修飾していることがわかります。この他にも、Mae llyfr hardd gyda fi. (英語に置き換えると、Is a book beautiful with me でしょうか。日本語訳は「私はきれいな本を持っています。」になります。) というように、動詞が文頭に来るという特徴もあります。

NLW の職員同士のやり取りはウェールズ語が主に使われていますので、館内では「Bore da (おはよう)」「Diolch (ありがとう)」という言葉聞くことができます。初めて NLW に行った際、職員同士の会話が全く聞き取れずに非常に焦りましたが、ウェールズ語だったためでした。もちろん、利用にあたっては英語で問題ありません。



NLW のメインエントランス付近に設置されている二言語表記の看板



二言語で表記された標識。黄色い水仙 (写真左下) はウェールズを象徴する花。

## NLW とその成り立ち

### ウェールズ語

ウェールズでは、ウェールズ語と英語が公用語とされています。ウェールズ語はケルト語由来で、アルファベットを用いて記述します。看板などはウェールズ語と英語の二言語で表記されており、街中でウェールズ語の会話を耳にすることもしばしばあります。

しかし、ウェールズ語が公用語の立ち位置を確立したのは1993年のウェールズ語法の制定からであり、そこまで昔のことではありません。

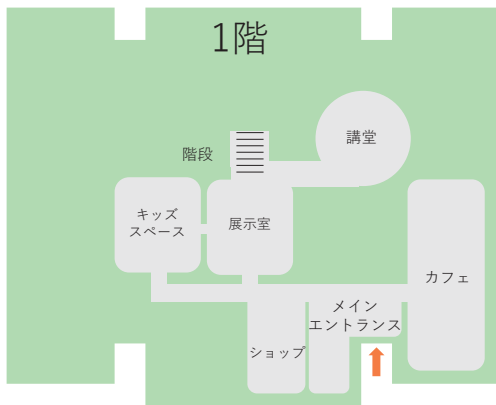
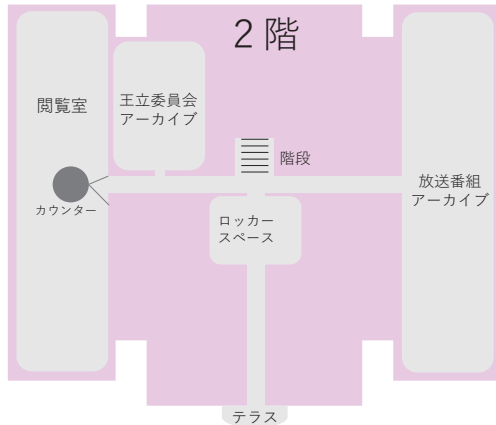
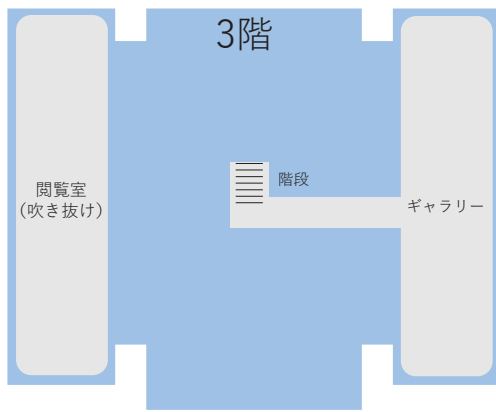
ウェールズ語は、1536年のイングランドによる統合で英語が公用語となったことで英語と比べて一段下の言語とみなされるようになったこと、18世紀からの産業革命期にイングランドなどから労働者が流入して英語話者が増えたこと、19世紀中ごろには学校教育での使用が禁止されたこともあって、話者が減少していき、絶滅が懸念された時期がありました。このような中、ウェールズ文化・ウェールズ語復興運動が19世紀後半から始まり、1939年にアベリストウイスにウェールズ語で教育する小学校が設立、1967年には法的手続きにおけるウェールズ語の使用を認めた「ウェールズ語法」が制定、1988年にウェールズ語に関する問題についてウェールズ国務長官に助言を行う諮問委員会である「ウェールズ語委員会」が発足、そして1993年の公共部門でウェールズ語を英語と同等に扱うとした、つまりウェールズ語を公用語扱いとする「ウェールズ語法」が制定されて、現在に至っています。

ウェールズにおける国立図書館の成立  
NLW の成立も、このウェールズ文化・ウェールズ語復興運動の流れの上にあります。

ウェールズ初の大学としてアベリストウイス大学が1852年に創設され、1873年からは同大学を中心にウェールズ語の資料を収集する活動がはじめられるようになり、ウェールズの図書館を設立しようという動きにつながりました。この運動は1905年に実を結び、医師で本の収集家であったサー・ジョン・ウィリアムズ (Sir John Williams) のコレクションを中心に設立が決定、1911年には納本図書館となりました。このような設立過程を経て、NLW はウェールズのために記憶と文化を保存し、伝承していくことを使命に掲げています。

### NLW の利用について

NLW はカンブリア線アベリスト



NLW 館内平面図（主な利用者スペース）。本図の左側が北。



壁面の素材が異なり、増築の様子がうかがえる。

ウイス駅から小高い丘を登り徒歩で約15分、バスで約5分程度のところにあります。すぐ近くにはアペリストウイス大学ペンングレイスキャンパスがあります。丘の中腹にあるため非常に見晴らしがよく、テラスからは街を一望することができます。図書館の常ですが、書庫を拡張するために三度の増築がされており、壁面の素材が違う建物がつながっていることからその様子がうかがえます。

NLWの資料を利用するには利用者登録する必要があります。メインエントランスの受付で必要事項を端末に入力し、住所を証明する書類を提示すると、職員がその場で顔写真を撮影してくれます。確認手続きが済むと、すぐに写真入りの登録カードを発行してくれます。アペリストウイスは海沿いにあるため風が強い日が多く、よく雨も降るので、油断をするとひどい写真になります（筆者の実話）。登録カードの作成時にはお気を付けてください。

メインエントランスから入ると、一階にはカフェとショップ、キッズスペースと展示室などがあります。ショップの前を通って展示室を抜けると、閲覧室のある二階に上る階段が現れます。階段を上るとまずロッ



閲覧室。写真中央の円形の部分がカウンターで、写真の左側から入室する。

カースペースがあります。閲覧室には筆記具やノート、PCと貴重品しか持ち込みができませんので、大きな荷物はここで預けます。

ロッカースペースを出て、廊下を左側に進むと同じ建物内にある王立委員会アーカイブ (Royal Commission Archive) の部屋が見えます。ここではウェールズの考古学、建築学、海洋遺産についての理解を促進するための、地図、写真、報告書などの資料が利用できます。また著作権保護期間が満了していることが確認できた一部資料はデジタル化しており、オンラインカタログ「Colin」を通じて利用することも可能です。

王立委員会アーカイブの前を抜け、利用者カードをかざしてゲートをくぐると、吹き抜けの空間が閲覧室です。建物の北側にあり、長さ175フィート、幅47フィート、高さ33フィートです。閲覧室の中央、ゲートのすぐ横には円形のカウンターがあります。カウンターを中心に東西に閲覧席が設けられています。閲覧席を囲むように書架がありますが、レファレンスブック以外は書庫に収められているので、書籍を閲覧するためには備え付けの端末から申し込みを行います。この端末からは、デジタル化された資料やウェ



(右) NLWの2階に位置する放送番組アーカイブの入口。(左) 放送番組アーカイブ内のパネル。

ブアーカイブ資料も利用することができます。

申し込みをした資料はスタッフが書庫からカウンターに運んできてくれ、登録カードのIDで呼んでくれます。資料は館内閲覧限定です。皮装丁の書籍のような古い資料やエフェメラを読んでいる利用者が多く、カウンターではいつもスタッフが資料の取り扱い方法について説明をしていました。

NLWの所蔵資料には、政治家ロイド・ジョージ (David Lloyd George) のコレクションや、ウェールズ語で印刷された最初の本である「Yn Ilywr Iwmn」(1546年) など、600万点の書籍や新聞、羊皮紙本4万点、150万点の地図などがあります。また、デジタルに関する活動も積極的に行っており、約700万アイテムがデジタル化されている他、デジタル化した地図や写真と現在のオンライン地図とのマッピングを行っており、電子情報の長期保存に関する活動ではデジタル保存連合の賞 (Digital Preservation Awards) も同館は受賞しています。

閲覧室の反対側の南側奥には、放送番組アーカイブ (Wales Broadcast Archive) があります。ウェールズ語の復興運動と放送メディアは

切っても切れない関係にあります。1958年にウェールズ語によるテレビ放送を求める要請がなされ、ウェールズ語専門のBBCラジオ・カムリ (BBC Radio Cymru) が1977年に、ウェールズ語専門のテレビ放送局S4C (Sianel Peddar Cymru) が1982年に開局しました。

これらの放送はウェールズの人々のアイデンティティの醸成に大きな役目を果たしてきました。このウェールズに関するBBCやS4Cの放送番組や放送に関する資料がウェールズの文化を伝えるものとしてNLWに寄贈され、NLWがカタログを作成し、デジタル化して利用できるようにしたのが放送番組アーカイブです。資料は放送番組アーカイブ室内の端末から自由に視聴できるようになっています。コピーはできませんが、ウェールズ各地にある図書館や文書館からも放送番組アーカイブ資料を利用できる体制を整えているとのこと。

更に階段を上ると、最上階はギャラリー (Gregynog Gallery) となっており、所蔵コレクションを基にした展示が行われています。また、ここでは厳かな建物ときれいな景色を背景に結婚式を挙げることもできます。





(右) ヘイ城の壁にあるリチャード・ブースのレリーフ。(左) 正直本屋 (Honesty Bookshop)。

ヘイ・オン・ワイとブック・フェスティバル

ヘイ・オン・ワイはウェールズとイングランドの境界にある街で、「本の聖地」とも呼ばれています。この街の出身でオックスフォード大学を卒業した、自称「本の王」リチャード・ブース (Richard Booth) が1960年代に街の建物を買い取って古書店を開店して以降、多くの古書店がこの街にオープンしてきました。1988年からはブック・フェスティバルが開かれるようになり、現在の本の聖地としての地位を獲得するに至っています。

ヘイ・オン・ワイの街の中には現在、約30軒の古書店・本屋があるといわれており、通りを歩くと数軒ごと古書店や本屋が現れます。古書店・本屋のタイプは、オールジャンルを扱うものから、ミステリーや音楽、映画、児童書といったテーマを専門に扱うものなど、さまざまです。有名なのはブースが開設した「正直本屋 (Honesty Bookshop)」でしょう。ヘイ城を買い取って開設された古書店で、日本の無人販売と同じ仕組みになっています。ヘイ城の中庭に屋根だけがある本棚が置かれており、そこに古書が並べられ、値段はすべて1ポンドで、お客さんは横のポストにお金を入れる形式となっています。

す。「正直本屋」とは言いえて妙だと思いました。

ヘイ・オン・ワイのブック・フェスティバルは例年5月末から6月上旬に10日ほど連続して開催されます。以前はヘイ城や街の中で行われていましたが、近年は規模が大きくなっているため、街の中心から10〜15分程度歩いた野原に会場を移して行われています。会場ではプレハブやテントが設置され、出版社や本屋のブースは当然のこと、飲食店やお土産物屋もありました。フェスティバル開催中は、このプレハブやテントで作家や出版社、放送局によるトーク、対談、講演会、ワークショップ、ヨガのイベントなどが、毎日50近く開催されているとのことでした。訪れた日は一番大きなプレハブでサイン会が行われており、入り口からはみ出て長蛇の列となっていました。

ヘイ・オン・ワイは、イングランドにあるレフォード駅からバスで牛や羊を横目に野原の中を抜けて1時間近くかけてやっと着くような場所です。1キロメートル四方に収まるような小さな街で、15分も歩けば端から端まで行けてしまう上、街の外は国立公園です。同じ古書店街である神田神保町が東京という大都市の中に位置するのに対し、ヘイ・オ



## ブック・フェスティバルと作家

この小さな商業の町ヘイ・オン・ワイの外れに位置する、おそろしくぬかるんだ空き地で開かれる文学祭は、その[文学祭]中でも群を抜いて大がかりな催しに成長した。ふたりの米国大統領、かの有名な1963年の大列車強盗の犯人たち、はてはJ・K・ローリングにいたるまで、さまざまな人物がこれまでゲストとして招かれており、いまやはるか遠方からも客が詰めかけるようになって久しい。  
アンソニー・ホロヴィッツ (山田蘭訳) 『メインテーマは殺人』

英国の作家の中ではブック・フェスティバルは有名なイベントのようで、例えば、日本でも賞を複数とったミステリー『メインテーマは殺人』では、作家である主人公がブック・フェスティバルの講演会で話しているシーンがあります(2024年のブック・フェスティバルでは著者のホロヴィッツ自身が実際に話すイベントがありました!)



(上) ブック・フェスティバルのエンタランス。

(左) 「World's first book town」の文字が書かれている街中の車止め。

ン・ワイは大自然に囲まれたのどかな街です。翻っていうと、この街にわざわざ来る理由は「本」以外は何とんだないのです。筆者が訪問した日はブック・フェスティバル開催中の5月28日でしたが、この小さな街は多くの人であふれていました(近くの宿泊施設はすべて満杯で泊まりはあきらめました)。本を目当てにこれだけの人が訪れていると思うと、感慨深いものがありました。

**おわりに**

N L Wとブック・フェスティバルでは、図書と図書館は文化を伝えていく役割を負っていること、その土地の活性化につながるということを体験しました。一時はなくなるとも危惧されたウェールズ語の復興とその継続を担ったN L Wでは、書籍を収集し、保存し伝えていくだけではなく、資料のデジタル化やAIを使った英語とウェールズ語の翻訳事業なども積極的に行っています。ヘイ・オン・ワイも古くからの町並みを残しつつ、ブック・フェスティバルでは時宜にかなったテーマのイベントが毎年開催されています。

イギリスを訪問する際には、本をテーマに、ウェールズも是非、訪れてみてください。

※白地図の出典：白地図専門店 <https://www.freemap.jp/free.html>

※写真は全て筆者撮影

錦絵と写真でめぐる

# 日本の名所

「錦絵と写真でめぐる日本の名所」は、国立国会図書館が所蔵する錦絵や写真などを始めとするさまざまな所蔵資料から、江戸・明治・大正を中心とした日本の風景をお届けする電子展示会です。

1

## 全国の錦絵や古写真が見られる！

国立国会図書館が所蔵する江戸時代の錦絵や明治・大正の写真等を、スマートフォンやPCからどなたでも無料でご覧になれます。利用者登録は必要ありません。

2

## 画像をダウンロードして利用できる！

掲載画像は全て著作権保護期間が満了しているため、国立国会図書館へ申請せずに印刷物や映像コンテンツ等にご利用になれます。商用利用も可能です。

※詳しくは、サイト内の「ご利用について」をご確認ください。

3

## 画像や名所のコンテンツが今後も増える！

資料デジタル化の進展に伴い、今後も掲載する画像や紹介する名所を追加していく予定です。最新情報は国立国会図書館の公式 SNS でも発信予定です。



「錦絵と写真でめぐる日本の名所」は国立国会図書館の電子展示会です。  
スマートフォンやPCからどなたでもご覧になれます。





**松島**

宮城県中部東部の松島湾に位置する島々とその付近の地形、日本三景の一つ。ウロマツヤアマツが繁る数十の島々が特徴的な景観をなし、多くの作品に描かれている。明治以前には、小型の帆船が行き来していたことが見て取れる。史跡も多く、瑞巖寺、観音寺などが知られる。

47 都道府県、500 地点以上の名所のページに、4,000 点以上の画像を掲載しています。  
※令和 6 年 7 月 1 日現在

**錦絵・絵画等**

**写真**

**その他の資料**

- ・松久謙徳村書・画「松島名勝地」(宮城多賀郡松島(ほか)1720) 冊
- ・松島風景 巻ほか「松島図説 再版」(宮城新 1846) 冊
- ・「松島案内」(宮城新 1911) 冊
- ・庄正正光 著「仙台松島地誌(新宮城案内) 附・金華山案内」(東京地方(ほか)1913) 冊
- ・山下要太郎 編「松島地誌」(竹内要蔵 1915) 冊
- ・宮城地誌 編「松島写真帖」(宮城新 1915) 冊
- ・海防教育 著「松島」(東北遊覧 1920) 冊
- ・海防第一 編「仙台及松島案内」(東京印刷 1921) 冊



名所ごとのページで、その名所の錦絵や写真を閲覧できます。

**諸国名所百景**

「諸国名所百景」は、徳川氏(二代)が安政6(1856)年から文久元(1861)年にかけて制作した錦絵です。巻元は「名所江戸百景」を比喩した鳥屋架吉で、彫版技法にもこだわっています。武慶(二代)が二代目を揃いで数か月後から制作が始まりました。

全画像の一覧は、NDLイメージバンク「諸国名所百景」でもご覧になれます。

名所絵のシリーズを地図上に並べた形でご覧になれます。

**名所の成立**

名所は古くは「なごころ」といい、和歌の歌枕に採られる特に名の立った地、名高い場所を指した言葉でした。文字、故事、神話、伝説に登壇する名所、旧蹟が「なごころ」に当たり、実際にはない場所もありました。しかし、江戸時代になって旅行が盛んになると、名所は実際に訪れることができる場所を指す言葉として用いられるようになり、各地に「名所(めいしよ)」が誕生します。

江戸時代は政治が安定し、参勤交代によって街道や宿泊施設、乗り物等が整備され、貨幣の流通も盛んしたことにより、旅が安全、便利にできるようになります。景観も早稲な時代のもので、経済的な力を付けてきました。従来の旅は季節毎期(1716-36)頃から個人となり、文化・文政期(1804-30)には旅ブームが起こります。

当時、最も人気のある目的地は伊勢神宮でした。というのは当時の医療は自由に旅行することはできず、参詣・参宮のための信仰上の旅行のみ許されていたためです。しかし、江戸から伊勢参りに行った人のほとんどは、参宮の後で京都、大阪まで足を伸ばして、名所・旧蹟を巡り、芝居や歌舞伎の興物を楽しんでいました。

「伊勢参宮大陣室へもちよと参り」

名所にまつわる歴史を紹介するコラムも掲載しています。

<https://ndlsearch.ndl.go.jp/gallery/landmarks>





秋のおたのしみ会の冒頭でわらべうたを歌っている様子

## 「面白い！」 を引き出す



国立国会図書館の中で、唯一、子どもに直接サービスを提供することを任務としているのが国際子ども図書館児童サービス課です。児童サービス運営係では、子どもたちに絵本を読んだり、イベントを企画したりします。楽しそうに聞こえますよね？ でも、子どもたちはとても手強いんです。面白くないとすぐにそわそわし始め、それを見るとこちらも冷や汗が噴き出します。子どもたちに「面白い！」と思わせるのは至難の業。子どもたちの「面白い！」を引き出すために、我々は、子どもたちに何をどのように届けるか真剣に考え、読んだり歌ったりの届け方の練習を重ねています。

例年、恩賜上野動物園の協力を得て行っている「秋のおたのしみ会」も子どもたちの「面白い！」を引き出したい企画の一つです。特定の動物をテーマにした絵本と、飼育員さんのお話を組み合わせたいイベントです。令和5年度のテーマは「ウサギ」。我々は、ウサギが登場する面白い絵本を選んで読みました。1冊は、タンザニアの絵本作家ジョン・キラカが、ティンガティンガのスタイルで母国の昔話を描いた愉快的絵本『ごちそうの木』で、知恵者のウサギが動物たちの飢餓を救う物語です。もう1冊は、やぶうちまき藪内正幸の動物画が見事

で、足跡の絵から次のページの動物を想像させる絵本『なにのあしあとかな』を選びました。この本は、読む人の問いかけに、聞く子どもたちが答えるクイズ形式で、楽しく読み進められる本です。飼育員さんは、ウサギについてのクイズを出したり、頭骨や毛皮などの標本を見せたりしながら、カイウサギの特徴や生態について紹介しました。カイウサギはコロコロとペットの2種類のウンチをします。ペットのウンチには大事な栄養素が含まれているため出したそばから自分で食べてしまうので、減多にお目にかかれないそうです。そんな珍しいウンチのお話も聞けて、面白さ満載でしたが、さて、子どもたちにはどうだったかな？物語に耳を傾けたり、クイズに元気よく答えたり、熱心にメモを取ったり、退屈していたり、子どもたちの反応は様々でした。

「面白い！」は「知りたい・読みたい学びたい」の入口です。面白くなければ、子どもたちはその先へ自分で進んでくれません。子どもたちが、自分の意思で知りたいことに向かっていくきっかけづくりが、我々の仕事かなと思うこの頃です。子どもたちの「面白い！」を日々、模索しています。

(児童サービス課 狐狸庵婆)

\* タンザニアを代表するポップアート。エドワード・サイディ・ティンガティンガ (1932-1972) が道端で絵を描いていたのを起源としている。

\*\* 野生のアナウサギを原種とする家畜用の品種。

# 本屋に

# ない本



殿さまの1年  
盛岡藩年中行事を紐解く

もりおか歴史文化館活性化グループ 編・刊  
2022.8  
63p; 30 cm  
<請求記号 GD28-M74>

端午の節句や七夕、十五夜やクリスマスなど、季節ごとに色々なイベントや行事がある。伝統的に行われていたであろう行事から、比較的新しそうな行事まで、季節を感じさせる行事は私たちの生活に彩りを与えている。

本書はもりおか歴史文化館の企画展「殿さまの1年 盛岡藩年中行事を紐解く」の図録である。この企画展は、盛岡藩第13代藩主・南部利済（とんだ）の時期にあたる天保10（1839）年に表用人（幕府や他大名との渉外を担い、贈答品に関わることも職掌とした役職）がまとめたと考えられる「年中行事（春夏秋冬）」をはじめとする同藩の「年中行事書」を取り上げたものである。「年中行事書」とは地域や組織の中で

毎年行われる伝承的行事についての記録である。

図録の前半には、墨書き、くずした字、箇条書きで記された「年中行事（春夏秋冬）」を、私たちが見慣れている見開き1か月、曜日の区切りのある現代のスケジュール帳のように整えたものが掲載されているため、今から約200年前の1年の流れを気軽に想像することができる。

スケジュール帳に記載された行事を追っていくと、気付くことがある。例えば1月は正月の行事として挨拶や初（しづめ）、初（はつ）など、何かとその年初めての行事が続く。新しい年の最初の行事は当時の人々にとって欠かせないイベントだったよう

だ。対照的に12月は正月準備の予定が入るくらいで、少なくとも「行事」はなく空欄が多い。

また、年間を通してところどころマーカーなどで色がついているように印刷されているものが目立つ。私たちも自分のスケジュール帳で重要な行事や予定の色を変えたり、蛍光マーカーを塗ったりしないだろうか。この図録で色付けされるものが将軍家とのやり取りに関するもので、毎月のように提出や献上が予定されている。盛岡藩では1年の後半に献上が多くなっている。現在でも「お中元」や「お歳暮」などの贈答文化は続いているが、当時はより頻繁に交わされていたことが読み取れる。図録後半のコラムでは

献上のための諸段階（担当者を決める日、調達する日など）が年中行事化されていたと記載されており、将軍家との関係の安定性を保つものとしての贈答の重要性が推し量られる。

そのほか、図録の後半には江戸時代に盛岡藩内で作成されたさまざまな年中行事書の資料紹介や、5本のコラム、年中行事の舞台（盛岡城下編・盛岡城外周部編・盛岡城内部編）の解説などが掲載されていて、どのような行事だったのかイメージする手助けとなっている。この図録を手に、約200年前に思いを馳せてみてはいかがだろうか。

（郷田 亜弥）

国立国会図書館は、法律によって定められた納本制度により、日本国内の出版物を広く収集しています。このコーナーでは、主として取次店を通さない国内出版物を取り上げて、ご紹介いたします。

# NDL Topics

## 電子展示会 「平成を彩った絵本作家たち」

電子展示会「平成を彩った絵本作家たち」を3月6日に公開しました。令和2年度に開催した国際子ども図書館開館20周年記念展示会をもとにしています。

平成に活躍した日本の絵本作家35名と、それぞれの作家が生み出した約200点の絵本を紹介し、4つの特別コーナー（①昭和の名作絵本、②逆輸入絵本、③ブックスタートと赤ちゃん絵本、④震災に思いを寄せ）とあわせて、平成という時代を振り返ります。

<https://www.kodomo.go.jp/anv20hde/index.html>



○問合せ先 国際子ども図書館資料情報課 展示係  
電話 03(3827)2053 (代表)



## 国際子ども図書館展示会

「絵本で知る世界の国々ーIFLAからのおくりもの」

IFLA（国際図書館連盟）の「絵本で世界を知ろうプログラム」によるカタログ第3版（2023年）の完成を記念し、世界42の国と地域の図書館員によって選定された、各国・地域の代表的な絵本360冊を展示します。ご自由に直接手にとってご覧いただけます。

○開催期間 7月9日（火）～8月25日（日）

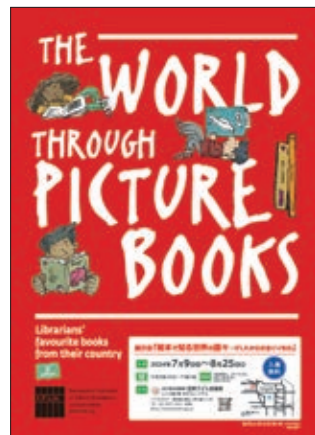
※月曜日、7月17日（水）、8月11日（日）、  
祝、8月21日（水）は休館

○開催時間 9時30分～17時

○会場 国際子ども図書館レンガ棟3階本のミュージアム

「絵本で世界を知ろうプログラム」は、世界の子どもたちが絵本を通じて国際理解を促進することを目的としています。世界各地で展示会を開催することができます。展示会セットが2組作られ、1組は国際子ども図書館に、もう1組はフランス国立図書館に寄贈されました。国際子ども図書館では、日本を含むアジア・オセアニア地域の図書館等に対し、貸出しを行っています。

○問合せ先 国際子ども図書館資料情報課 展示係  
電話 03(3827)2053 (代表)



展示会「絵本で知る世界の国々ーIFLAからのおくりもの」ポスター

## 令和6年度資料保存研修

国内の各種図書館員等を対象に、資料保存に関する基礎的な知識と技術の習得を目的として、資料保存研修を実施します。

○日時 9月26日(木)、27日(金)  
各日10時～16時30分(各日とも同じ内容です。)

○会場 東京本館 新館3階大会議室

○対象 国内の公共図書館、大学図書館、専門図書館等に勤務する方

○内容 実習：①簡易補修②無線綴じ本を直す  
講義：図書館における資料保存

○持ちもの えんぴつ、エプロン

○定員 40名(各日20名)

1機関からのお申込みは1名かつ1回までとし、申込み多数の場合は調整させていただきます。

○申込期間 7月9日(火) 10時～26日(金) 17時

○申込方法 当館ホームページをご覧ください、参加申込みページからお申し込みください。

ホーム↓資料の保存↓保存協力↓おもな研修会や講演会のテーマ・記録等↓令和6年度資料保存研修

[https://www.ndl.go.jp/preservation/cooperation/training\\_r6.html](https://www.ndl.go.jp/preservation/cooperation/training_r6.html)

※7月9日(火)に公開予定です。



○問合せ先 収集書誌部資料保存課

電話 03(3506)5219(直通)

電子メール [honzonka@ndl.go.jp](mailto:honzonka@ndl.go.jp)

## 令和6年度利用者アンケートご協力をお願い

国立国会図書館では、提供する各種サービスを改善するために、アンケートを実施しています。

○アンケートページ

国立国会図書館ホームページ↓国立国会図書館について↓利用者アンケート

<https://www.ndl.go.jp/aboutus/enquete/index.html>



利用者サービスアンケート

国立国会図書館のサービスを利用されている方々を対象としたウェブアンケートです。

※実施期間 6月3日(月)～10月31日(木)

○アンケート回答ページ

<https://enquete.ndl.go.jp/488724/p/Bull>



## 各コンテンツ・サービスについてのアンケート

個別のコンテンツやサービスについての各種アンケートも実施しています。

※実施期間 コンテンツ、サービスごとに異なります。

実施時にアンケートページ及びコンテンツ、サービスのページ等でお知らせします。

皆様のご意見をお聞かせください。

○問合せ先

総務部企画課評価係

電子メール [hyoka@ndl.go.jp](mailto:hyoka@ndl.go.jp)



# NDL Topics

## 新刊案内

### 令和5年度国際政策セミナー報告書

「ロシアによるウクライナ侵略をめぐる諸問題」

ロシア・ウクライナ戦争が現代戦の遂行について

我々に語ること

ローレンス・フリードマン教授の講演をめぐって

ロシア・ウクライナ戦争と現代戦―米国ファクター

の検討―

ロシアによるウクライナ全面侵攻から2年―変わったものと、変わらないもの―



A4 52頁 不定期刊 ISBN 978-4-87582-930-0  
以下のページからPDFファイルをご覧いただけます。  
<https://www.ndl.go.jp/jp/diet/publication/document/index.html>  
※7月16日（火）に公開予定です。

### レファレンス 881号

法定外目的税の導入に伴う周辺自治体への影響―産

業廃棄物税をめぐる実証分析―

明治憲法の緊急事態条項

オンライン賭博の規制―日英の動向について―



A4 90頁 月刊 1,100円（税込）  
発売 日本図書館協会

### カレントアウェアネス 360号

図書館における「音」をどう包含するか

公共図書館におけるサイバーセキュリティ対策の実

践方法について

3つの情報リテラシー概念に関する検討…各分野に

おける背景と問題意識に着目して

横浜国立大学附属図書館ビジョンを策定して―大学

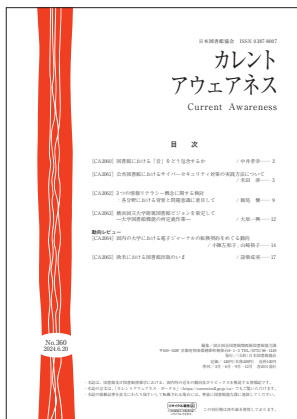
図書館機能の再定義作業―

＜動向レビュー＞

国内の大学における電子ジャーナルの転換契約をめぐ

ぐる動向

欧米における図書館出版のいま



A4 24頁 季刊 440円（税込）  
発売 日本図書館協会

入手のお問い合わせ  
日本図書館協会  
〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14  
電話 03(3523)0812

# 本誌の読者アンケートを実施しています

『国立国会図書館月報』のより良い誌面作りを目指し、6月25日（火）から12月5日（木）まで読者アンケートを実施しています。皆様から寄せられましたご意見・ご感想を、今後の企画・誌面作りの参考にさせていただきます。

以下のURL、QRコードからアクセスし、ウェブフォームでご回答ください。読者の皆様のご回答をお待ちしております。

アンケート URL

<https://enquete.ndl.go.jp/131776?lang=ja>



# 7/8

NATIONAL  
DIET  
LIBRARY  
MONTHLY  
BULLETIN  
2024.7/8

NO.759/760

JULY/AUGUST  
2024

## CONTENTS

- 01 <Book of the month - from NDL collections>  
Tracing history in a book from Nanki Bunko: *The Enoch Pratt  
Free Library of Baltimore City*
- 06 59th Committee on Designation of Rare Books  
Materials recently designated as rare books
- 18 Travel writing on world libraries  
National Library of Wales and Hay Festival Hay-on-Wye
- 25 Digital exhibition “Exploring Japanese Landmarks in Nishiki-e  
and Photographs”
- 27 <Tidbits of information on NDL>  
Fun for Children
- 28 <Books not commercially available>  
*Tonosama no Inen: Moriokahan nenchu gyoji o himotoku*
- 29 <NDL Topics>

国立国会図書館月報

令和6年7/8月号 (No.759/760)

令和6年7月1日発行

発行所 国立国会図書館

編集者 川西晶大

印刷所 株式会社丸井工文社

〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1  
電話 03 (3581) 2331 (代表)  
FAX 03 (3597) 5617  
E-mail [geppo@ndl.go.jp](mailto:geppo@ndl.go.jp)  
<https://www.ndl.go.jp/>

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りいたします。  
本誌に掲載された記事を転載する場合（全文または長文にわたり抜粋する場合、または図版を転載する場合）には、  
事前に当館総務部総務課にご連絡ください。  
本誌517号以降、PDF版を当館ホームページ（<https://www.ndl.go.jp/>）>刊行物>国立国会図書館月報でご覧いただけます。



NATIONAL  
D I E T  
LIBRARY  
MONTHLY  
BULLETIN  
2024.7/8

 国立国会図書館  
National Diet Library, Japan

図

玉

玉

冊

人

六